

帰国後の社会還元について

高田宏仁

(JICA 地球ひろば市民参加協力促進課長)

ご紹介いただきました地球ひろば市民参加協力促進課の高田と申します。地球ひろばとは、市民参加協力事業の取りまとめをおこなっているところです。簡単に言いますと国民の皆さんに途上国の現状を理解してもらい、我々の活動を支持してもらい、できれば開発そのものに携わっていただくというようなことを進めているところです。

皆さん、現職教員の特別参加制度を利用して 4 月から訓練に入り、そして派遣されるということで、現職教員特別参加制度をご活用していただき大変ありがとうございます。皆さんのご活躍を期待しております。いろいろな国に行かれるようなので、折角なので質問いたします。私がこれまで赴任した国を挙げます。パラグアイに行かれる方、いらっしやいますね。それからホンジュラス、いらっしやいますね。いずれもとてもいい国なので楽しみつつ良い活動をしてもらいたいと思います。

本日の私の話の内容ですが、一言でいいますと、派遣中および帰国後に、先程私が言いました国民の皆さんに理解を深めていただくために、皆さんにやっていただきたいことをイメージしていただけるようなお話にしたいと思っています。

本日のタイトルである社会還元ということですが、これはボランティア事業、協力隊事業を実施していく中で、皆さん一人一人にはボランティアということで活動してもらいますが、帰国後にその経験をいろいろ広めてもらったり、ボランティア事業を紹介してもらったり、その経験を活かして別の仕事に就いてもらったり、それから国際理解の推進に役立っていただいたり、地域の活性化や多文化共生社会の対応をしていただく、ということを考えています。これはここ数年非常にクローズアップされている部分です。実際に協力隊 OB の方が町おこしをやったり、起業をしたりなど、そのような形で地域にとってプラスになるということで注目されている部分です。皆さんは教師ですので、学校現場において協力隊の経験なりを還元していただきたいと思っています。我々が大きな目的として掲げていることは、国民・市民の皆様の理解と参加ということです。これを市民参加と呼んでいます。国際理解を深めてもらい、それを踏まえて支持をしてもらう、なお且つ一部興味がある人に参加をしてもらう、ということです。市民参加ではないタイプがあり、国の事業としてやっている技術協力事業、無償資金協力、有償資金協力といった殿川課長が説明したような部分もありますが、市民参加は市民の方に実践していただきたいと期待している部分です。このようなことが多くおこなわれ、国際協力が日本の文化になれば、と我々は思っています。

このような理解の促進だとか、開発への貢献という言葉に対して、実際にどういう参加

の仕方、かかわり方があるのかということでは、スライドの右側に事業のことが展開されています。例えば、イベント・セミナーなどに参加してもらうということがあります。もちろんボランティア事業もあります。また、草の根技術協力というものがあり、NGOの方々が途上国でこんな活動をしてみたいというものを形にしていくというものもあります。また、開発教育支援事業というものがあり、我々地球ひろばを始めとした全国の国内機関において、後で説明します出前講座を行ったり、先生に途上国に視察に行ってもらい見聞きしたことを授業に活かしてもらう、という事業をやっております。これらのような活動によって市民・国民の理解と参加が深まり、それが日本全体の文化になれば、ODA 予算も増え、我々の活動もどんどん広がっていく、と考えているところです。

さて、開発教育という言葉我々は使っているのですが、これはヨーロッパのNGOなどが使い始めた言葉で、この言葉の定義にはいろいろな考え方があり、我々としては結果的に開発教育という言葉を使っているのですが、国際理解教育という言葉のほうがメジャーなのでその言葉も我々は使わせてもらっています。これについてはおそらく次のコマで手嶋先生がお話しをされると思います。

我々JICAでは開発や国際協力の取り組みを促進するということもあり、開発という言葉がある方が使い易く、外務省もそのように使っているので、開発教育という言葉を使っています。

また具体例として写真をお見せしますが、我々は現場の教育のところに入り込んでいるわけではなく、開発教育の現場というのは日頃皆さんが携わられている教育現場であり、あくまで皆さんが授業を行っていく中で取り入れたい、取り入れると面白いのでは、という場面のためにいろいろな材料を提供している、ということです。

我々にとってここ数年非常に追い風になったのが総合学習という時間です。皆さんのほうが詳しいと思いますが、教育現場ではやり方に腐心をされたり、工夫をされたりという中で、国際理解というテーマがあって、我々もそれに協力をさせていただいたといえますか、活用させていただいた、ということです。国際協力または国際理解をやっているNGOや国際交流協会などと協力して、こういうことができます、こういう資料があります、ということでやらせていただきました。ところがこの間、削減が決まり、我々もとても心配しています。これまでは国際理解ということであれば途上国の人にも英語がしゃべれる人が大勢いるのですが、小学校からでしょうか、英語の時間が入ってきたということで、やはり英語となるとアメリカ、イギリスということになるのではと、今後の行方を注視しなければと思っています。

また学校外の市民社会でも、国際協力とはどういったものでしょうか、途上国ってどんなところですか、というような市民の皆さんからのニーズがあって、それに対して我々が情報提供をしています。また、一部では直接巻き込んで開発教育支援事業をやらせてもらっています。

次のスライドから少しわかり易いように写真を使いながら説明したいと思います。知見

の還元、考える機会の提供、橋渡し役と 3 つのカテゴリーに分けて、それに基づいてお話をします。主力になっているのは国際協力出前講座で年間 2400 件、小・中・高・大学生を中心に全体で 20 万人くらいに受けてもらっています。これは主に協力隊 OB の方々が学校現場に行き、私はこういう国でこんな活動をしてきましたという話をします。小学生の場合ですと、座学ではつまらないので、民族衣装を着て現地語で挨拶してもらって、子供たちに興味を持ってもらい、次の話につなげていく、というようなこともやっています。そのために帰国ボランティアに対してセミナーなどもやっています。また、施設訪問ということで全国に 17 のセンターがあり、そこで年間 1000 校を受け入れています。写真は地球ひろばで、体験ゾーンという体験型のスペースを設けており、途上国の現状を見て触って感じて理解してもらえるところです。ちなみに、ここに事業仕分人がいらっしゃって、コストが高いとの指摘を受けており、今後は改めていきたいと思っています。

次は開発教育のための教材の作成ということについてです。当然教材とは先生方が使われるものなので、我々がいわゆるきちんとした形で教材を提供するということではできませんが、使っていただける資料としていろいろなものを作っています。また、地球調査隊という HP も作成していますので興味があれば覗いてみて下さい。

それから考える機会の提供ということですが、この中でやっていることのひとつにエッセイコンテストがあります。中・高生を対象にエッセイを書いてもらい、上位入賞者には海外研修旅行をプレゼントするというものです。年間 7 万 5 千通の応募をいただいています。全校生徒の 3 割以上か 60 人以上の応募があると学校賞という賞を出させてもらっていますが、学校賞を出したところが 400 校ぐらいあります。ちなみにうちの学校でも応募したはずだという方いらっしゃいますか？失礼しました。では先ほどの出前講座で誰かが来たことがある、呼んだことがあるという方は？ありがとうございます。

次の教師海外研修は学校の先生方を対象にしたプログラムで、10 日間ほど途上国を訪問してもらい、協力の現場、途上国の学校現場を見ていただきます。国内センターによって異なりますが、前後の研修も組み合わせて実際に授業をするための研修なども組み込んでいる場合もあります。

もう一つの国際協力実体験プログラムは、地方のセンターを訪問してもらい、泊まり込みでもう少し濃密に体験してもらおうというものです。

これまでは海外や現場に直接行くようなものの紹介が多かったのですが、それ程時間がない、それ程興味がない、という先生方にも軽い気持ちで参加していただけるような研修も行っています。最近多いのは、学校現場入り込んでいくためには教育委員会などへの働きかけが大切かと思ひ、例えば教育委員会が実施する教員研修で、階層別やいろいろな専門研修のような場をお借りするというような形のものもあります。以上が、我々が行っている開発教育支援事業というものです。

我々が直接担当していないものにも有益な制度があります。皆さんには是非知っておいていただきたいと思うので、二つほど紹介します。一つは、「世界の笑顔のために」プログ

ラムというもので、途上国に寄付をしてみたい、困っている人を助けたい、という日本の人達からいろいろなものを集めて、それをボランティアが活動している現場に送って使ってもらおう、というものです。活動現場でこんなものが欲しいというものをリストアップします。ボランティアの皆さんが自分の任地でこんなところでサッカーやっているのだけれど、サッカーボールがないので是非送ってあげたい、と。そして、日本側のサッカークラブでいらなくなったボールとマッチングして送る、というものです。その時にただ送るだけではなく、送った人に対して現地のボランティアのからお礼状を書いてもらいます。現地でこういう風に使っています、という子供たちの写真をこっちに送ってもらおうと、寄付した方はそれをみてこういう風に役立っているのだ、というとても嬉しい気持ちになり、また、途上国ってこういう状況なのだ、というのがわかるということで、非常に好評なプログラムです。もう一つは小さなハートプロジェクトというもので、もう少し大きな活動資金などが支援されます。例えば、現地で、ここに橋が欲しいというようなときに使えるお金です。ただし、いずれのプログラム、プロジェクトも本来の活動とは分けてやらせてもらっています。

そして、このスライドが皆さんに覚えていただきたいものです。主に紫のところが開発協力支援事業なのですが、そういうものを使って、学校には途上国の理解促進などをやっています。先生が途上国を垣間見て帰国し、子供たちに伝える、というのが開発教育支援事業です。先程の小さなハート、世界の笑顔が真ん中にあります。右側はいわゆるボランティア派遣事業の部分なのですが、途上国にボランティアの方々が派遣されて帰国されるとボランティア OB ということになり、その後に出前講座に派遣される。それから教師海外なり、エッセイコンテストの入賞などで現地に行かれると、現場でボランティアの方々に触れて、途上国を垣間見るということになります。皆さんはこれを全て経験します。今は左側にいますが、これから右側のボランティアとして途上国に行かれ、2年間の活動を経て、戻って来ると右下に行きます。下は左と同じです。我々は開発教育の現場でいろいろな取り組みを行っていますが、皆さんはその受け手であり、我々が活用させていただいている主体でもあります。我々としてはとても貴重な存在だと思っています。これからの訓練・活動、それからその後の取り組みにおいて、その後の教師生活に生かしていただければと思っています。

皆さんは先ほど言いましたように、国際理解教育、開発教育の現場にいらっしゃって、そもそもの主体であり、且つこれからボランティアに直接従事されるということで、その経験を持って帰られるということから、我々が進めている開発教育の中核になると思っています。このため、皆さんからの協力をお願いしたいと思っていますし、そのために皆さんの活動については我々としても全面的に支援したいと思っています。

皆さんはこれから訓練を受けて派遣されるということなので、何か伝えられることがあればということでスライドに書いてみました。またこれからも話があるかと思うのですが、帰国後にもしくは派遣中に実践していただくためにということで、お願いいたしますか、

心がけていただきたいことです。開発教育に使う材料については、やはり現地の生の素材が一番ですので、活動中にそういうものの収集をやっていただければと思います。私も随分昔に協力隊員として現職で行きました。最初は、いろんなものが珍しかったり、面白かったりするのですが、活動のことでいろいろ悩んだりしているうち、時間は経っていきま
す。気が付くといつの間にか生活に慣れてしまい、最初の時の新鮮な緊張というか感覚は
なくなって、そういうものは思い出したくても思い出せなくなってしまいます。ですから、
最初のうちからはメモに留めておくとかすることが大切だと思います。私が行ったときは、
20年近く前で、日本との連絡といえば手紙ぐらいだったのですが、今はインターネットが
普及してスカイプもありますから、現地からの発信・連絡というのをやってもらえたらと
思います。ただ、あまりやりすぎると、せつかく途上国にいるのが逆にバーチャルになっ
てしまい、結局日本にいるのと頭の中が変わらないということになるので、気を付けて下
さい。皆さんは技術もお持ちですし、社会人としての経験もお持ちなので、援助の実践者
としても期待をしています。これから訓練がありますが、訓練の中で言われることはとり
あえず置いておくとして、私がいろいろな隊員を見て来て感じたところを話します。現地
にはいろいろな人がいます。JICA関係者の中にも、先程言いました専門家やJICAのスタ
ッフなどいろいろな人がいますので、そういう方々といろいろな幅広い視点から交流し、
意見交換してもらえるといいと思います。そうすると、普通の隊員だと自分の活動にそれ
こそ一生懸命というものなのですが、それを一歩ひいて高いところから見られるよう
になるのではないかと思います。そういう視点から見ると、国によっては日本の在留邦人
で他の仕事をされているとか、日本人学校の先生などもいらっしゃるので、そういう方々
と交流・意見交換というのも大切かと思ひます。

また、皆さんのレジュメには入っていないのですが、現職参加である皆さんは仕事を持
っている社会人であるということ、それから恐らく全員かと思ひのですが、公務員ですね。
これもすごい特徴であり、また先生という、非常に特徴的な3つの肩書をお持ちなので、
それを意識しつつ活動してもらえたらと思います。現職ということでは、私もそうだった
のですが、大変な使命感・責任感というものを抱える部分があると思ひます。自分たちを
送りだしてくれている、自分のために迷惑が掛っている人のためにきちんとやらないとい
う気持ちがあるのですが、それが余り強すぎるとプレッシャーになるので、そこは適宜上
手くやっていただければと思います。また、公務員という立場で行くと、JICAの現地スタ
ッフというのは基本的に税金で雇われているので、やはり公務員的な感覚が強いです。そ
れが普通の隊員になると、一般企業の社員であったり、学生であったりということで、公
務員のお金の使い方に非常に疑問があつたりします。そういうところを皆さんによく理解
してもらえるといいかなと思ひます。それから3つ目の先生ということなのですが、皆さん
は、どちらかというとな日本の会社の階層や役割がしっかりしている、または上意下達
のような考え方などなじみが薄いところがあるかと思ひます。ところが途上国はそういう縦
社会が一層強かつたりしますので、その点は一つ留意していただければと思います。いろ

いろいろ申し上げましたが、この 3 つの立場ということでは、皆さんはボランティアとしても模範になれる存在だと思いますので、そういう意識のもとにやって下さったらと思います。しかし、それだけでは息が詰まりますので、時々リラックスして下さい。日本と比べてとても自由な社会なので、大いにリラックスできると思います。そういう形で皆さんの素晴らしい活動を実現してもらえたらと思っています。

最後に先ほど申し上げました JICA 国内センターについては、HP などでも検索してみてください。派遣前の表敬でそこにいる方々とコンタクトする場面もあります。是非関係を継続させて、日本国内での活動に繋げていただければと思っています。御清聴ありがとうございました。